

学長、卒業生がそれぞれの立場から語る 農工大の魅力・強み、人材育成

学生時代を振り返って

学長 久しぶりの母校はいかがでしょう？懐かしさとともに、ご自身が学ばれていた当時のお話や現在のお仕事について聞かせてください。

藤森 繊維学部から工学部になって2年目で、キャンパスの周りは一面桑畑でした。馬術部に所属していて、東京オリンピックの馬術競技に参加する馬の管理を担当したのも良い思い出です。

尊田 農学部を卒業して、医薬品研究職などを経て現在は医療系のコンサルティングに携わっています。学生時代に所属していた土壌肥料学の研究室ではインドネシアやガーナの留学生と一緒に研究をしていました。身振り手振りでコミュニケーションしていましたが、学生時代にさまざまな人と関わりを持てたことは、とてもいい経験だったと思います。また、農学のベースはさまざまな分野に通じていることが卒業してからわかりましたし、卒業後の選択肢がたくさんあったように思います。



藤森 私は、大学を卒業後、経営工学を学ぶため大学院に進学し、現在の包装資材メーカーに就職しました。弊社は創立100年の節目の年を迎え、食品・生活用包装材、医薬・医療用包装材などのライフサイエンス事業、情報電子事業、建築資材事業を手がけ、血栓形成能解析システムの開発にも取り組んでいます。農工大も今年が創基140周年という節目の年ですね。

学長 今年は大学創基140周年・同窓会創立50周年を記念し、式典も予定されています。これまでの長い歴史と伝統を引き継ぎ、農工大はその名の通り、農学と工学の実学をベースにしたものづくりを中心に教育環境を整え、社会で活躍できる人材を育成してきました。研究室を中心とした学習環境は、研究を深めていくだけでなく、さまざまな人間関係の構築にも関わっています。それぞれの専門分野の最先端はもとより、農と工の融合分野についても力を入れています。環境やエネルギーなどの分野は今や国のトッププライオリティになり、他大

学の方からは羨ましがられるほどです。そうした現状に甘んじることなく、『持続発展可能な社会づくり』のため、産学連携の推進をエンジンとしてイノベーションを引き起こす共同研究と実社会で活躍する実学重視の人材養成を進めています。

今、求められるものは

学長 日本はものづくりを基幹に発展してきました。しかし、現在、アジア諸国の発展はめざましいものがあります。そうした中、ものづくりにおける日本の優位性を保つには、産官学が手を組まないといけないでしょう。

尊田 産官学の連携はグローバル化にも密接に関わっています。学際的なバックアップは海外進出のエンジンにも動機にもなり得ます。実際医療や看護の分野ではグローバル推進の大きな力になっています。

学長 そうした情勢下で、企業のトップとしてどんな人材が必要とお考えですか？

藤森 変化が激しい中で、自分も成長できる人です。一人ひとりに最適な職場環境というのは現実的に難しいですが、したたかに生きられる人に入社してもらいたいですね。

尊田 仕事を通して感じるのは、スピード感と探求心です。仕事についての研鑽を継続することは、社会の変化に対応できる力になります。また、農工大でのものづくりの経験があったから、どんな状況でも自分の中に新しいことを始める力があると確信できました。

藤森 今の学生には自分の研究の枠にとらわれることなく、新たなチャンスに貪欲に向かっている。そのために、企業、大学ともにインターンシップの活用など改善の余地はまだあるのではないのでしょうか。

学長 インターンシップは実社会を知る良い機会ですから、有効活用する方法はまだありますね。例えば農学と民間活力を連携

農学と工学を学びの中心に、それらの複合領域、関連領域にまで及ぶのが東京農工大学の学びです。

社会ニーズへの応答はもちろん、さらにその先を見越した最先端領域にチャレンジ精神をもって進むのも特色といえます。

そうした“農工大スピリット”がどう育まれていくのか、また、人が育つ環境をどのように整えていくのか。

卒業生の思いや経験、学長の期待や決意には、あすの世界を担うみなさんへのメッセージが込められています。



させて新たな種としていくことや、企業出身の工学部の教員を中心に産業界との連携を深め広げていくこともできるでしょう。

“世界を視野に”の風が吹き始めた

学長 農工大は大学院教育に力を入れている大学でもあり、学部から博士後期課程まで進めば最長9年在学することになります。そのスパンで国際的に通用する人材を育てる“9年一貫教育”の取り組みが次々と始まっています。文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に採択された「ASEAN発、環境に配慮した食料供給・技術革新・地域づくりを担う次世代人材養成」では、学部の4年間で実用的な英語能力のレベルを上げ、海外へ行く経験をし、大学院では能動的な学習とその成果の発表や国際共同研究などを経験します。派遣予定の学生が受け入れ学生のケアにあたることで良

好な関係を築けるシステムも組み込まれています。また、非石油依存型食料生産の時代を創出するイノベーションリーダーの養成を目的としたリーディング大学院も2013年から始まっています。

尊田 ASEANでは2015年に経済統合が予定されていますね。カンボジアで進められているアジアハイウェイにしても、現地の人のパワーや熱意に打って出ようという人が必要ですし、日本への期待の大きさも感じます。

藤森 一方で、トルコでは中韓の進出はめざましいものがあり、日本はやや出遅れているという印象です。日本の“失われた20年*”の影響もあるのではないのでしょうか。

学長 国全体が内に目を向けすぎて、欧米などへ留学する学生も減っていました。ところが、世界展開力強化事業でASEAN諸国に短期研修に行くメンバーを募集したと

ころ、多くの学生が手を挙げてくれました。学生の考えも変わりつつあり、その風も感じているのではないのでしょうか。

藤森 タイとマレーシアに工場がありますが、向こうは多民族国家で、1つの視点だけでは物事は上手く運ばないというケースを数多く見えています。専門領域を持ったグローバルな視点は重要でしょう。

学長 社会が求める人材を育成するのは大学の使命です。新しい価値・イノベーションを創造するためには、育てるだけではダメ。実学を多様にかつ実践的に学べる場、グローバルを志向する環境、人的リソースの充実……スピード感と価値観が共有できる“学生が伸びる環境”をさらに拡充していきたいと思っています。

*バブル景気が終わった1991年から約20年以上にわたり日本経済が低迷した期間

学長対談



東京農工大学学長
松永 是
工学博士



株式会社東京医療コンサルティング
代表取締役
尊田 京子氏
東京農工大学農学部 1989年卒業



藤森工業株式会社
代表取締役会長
藤森 明彦氏
東京農工大学工学部 1967年卒業